

## 平城宮跡と平城京跡の調査

平城宮跡発掘調査部

平城宮跡発掘調査部では、1976年度に第1表に示した第97次から第101次までの32件に及ぶ調査を行なった。宮内では、まず、推定第1次朝堂院地区を対象とする調査を行ない(第97次)、東院地区については東南隅で1968年度(第44次)に一部を検出した庭園の北側部分の調査を実施した(第99次)。また、宮西北隅に近い佐紀池の調査(第101次)では園池の存在を確認した。平城京内では、奈良市第13中学校建設予定地における右京五条四坊三坪の調査(100次)、東大寺西面大垣、薬師寺西塔跡、西大寺本坊、法華寺金堂・経楼推定地、法隆寺本坊などで調査を行ない、見るべき成果をあげた。以下、主な調査の概要を報告する。

調 査 地 区	遺 跡・調 査 次 数	調 査 期 間	面 積	備 考
6ABS-AB・6ABF-B	平城宮 第97次	76. 4. 1~ 7.24	32.50a	推定第1次朝堂院
6ACO-C	平城宮 第98-3次	76. 5.17~ 5.18	0.14a	西北部(佐紀池)
6ADB-M	平城宮 第98-5次	76. 6.28	0.05a	馬寮北方
6ABA-J	平城宮 第98-8次	76. 8.30	0.04a	北面大垣外
6ABA-L	平城宮 第98-10次	76.11.16~11.18	0.24a	大膳職北方
6ABA-J	平城宮 第98-15次	77. 2. 9~ 2.14	0.11a	北面大垣外
6ADB-F	平城宮 第98-19次	77. 2.15	0.17a	西北官衙地区
6ALF-D.E.H.J.K	平城宮 第99次	76. 7.26~ 8.11 10. 4~ 77. 1.17	33.50a	東院庭園
6ACA-W.S・6ACB	平城宮 第101次	77. 1. 7~ 3.25	12.94a	西北部(佐紀池)
6AGR	平城京 第98-1次	76. 4.12~ 4.21	2.00a	右京京極、北辺坊
6AFC	平城京 第98-2次	76. 5.11~ 5.13	0.07a	左京一条二坊
6AGA	平城京 第98-6次	76. 7. 1~ 7. 5	1.00a	右京一条二坊三坪
6AGA	平城京 第98-11次	76.12. 9~12.15	0.28a	右京二条一坊小路
6AGO	平城京 第98-12次	76.10.19~10.28	0.40a	右京五条一坊三坪
6AGO	平城京 第98-14次	77. 1.19~ 3.30	0.28a	右京五条間路
6AFC	平城京 第98-20次	77. 2.22~ 2.24	0.86a	左京一条二坊十坪
6BFK-H	法華寺 第98-4次	76. 6.15	0.15a	旧境内
6BFK-F	法華寺 第98-7次	76. 8.12~ 8.19	0.90a	旧境内
6BFK-O	法華寺 第98-9次	76. 9. 2~ 9. 3	0.09a	旧境内
6BFK-L	法華寺 第98-17次	77. 2. 3~ 3. 1	1.22a	旧境内
6BFK-O	法華寺 第98-18次	77. 2.15	0.06a	旧境内
6BFK-J	法華寺 第98-21次	77. 2.28~ 3. 5	0.70a	旧境内
6BTD	東大寺	76. 4.21~ 6.23	3.35a	西面大垣
6BTD	東大寺 第98-13次	77. 1.10~ 1.19	0.58a	旧境内
6BTD	東大寺	76.12. 4~12.15	2.50a	旧境内
6BTD	東大寺	77. 3.28~ 4. 4	0.60a	旧境内
6BYS	薬師寺	76. 7. 5~ 8.25	5.50a	西塔
6BSD	西大寺 第98-16次	77. 1.26~ 1.28	0.24a	境内
6BHR-G	法隆寺	76. 9.27~12.11	6.64a	境内

第1表 平城宮跡と平城京跡発掘状況

## 1. 平城宮跡の調査

推定第1次朝堂院東北地区の調査(97次) 今回の調査区域は第41次調査地の南に接し、東第一堂跡推定土壇の一部を含む。この地域の地形は推定第1次、第2次内裏がそれぞれ占地する二つの低丘陵の間を南北に延びる浅い谷筋にあたり、南へ向って緩やかに傾斜する。建物はこの谷を埋め立てて造営されている。

検出した主な遺構は建物5棟、掘立柱塀3条、築地塀1条、溝11条、井戸1基、土壇などである。これらの遺構は三層の整地土との関係からA・B・C・Dの4期に分けられる。

第1図 平城宮および平城京発掘位置図

A期 平城宮造営当初の整地以前の遺構で、4条の東西溝S D8372, 8373, 8380, 8385と土壇S K8418がある。溝S D8372は幅1.2m、深さ0.3m程度の素掘りの溝で、宮を南北にはほぼ二等分する位置にあり、第71次調査で検出した佐伯門東側、馬寮の南を限る東西溝の東延長上にある。S D8373はS D8372の南約10.5m(35尺)離れて平行する素掘りの溝である。土壇S K8418は浅いくぼみで、松皮、木材加工時の削り屑を含む。

B期 第1整地層の上で、溝2条、掘立柱塀1条を検出した。南北溝S D3765は素掘りの溝で、幅2~3m、深さ約0.6mである。推定第1次朝堂院の想定中軸線から東103m(340尺)の位置にある。南北60mを確認したが、さらに南へ続く。溝底には厚さ約0.3mの堆積層があり、

第2図 第97次発掘遺構図

二層に分かれる。下層には奈良時代初頭の瓦、土器を含み、第2の整地土で埋められる。溝S D 8376はS D 3765に東から流れ込む。掘立柱塼S A 8410はS D 3765の東17.5mにある。11間分(10尺等間)を検出したが、さらに南北に延びる。

C期 第2整地層による整地が行なわれ、推定第1次朝堂院の東面が掘立柱塼S A 5550Aにより区画される。その東に溝S D 3715が設けられる。掘立柱塼S A 5550AはB期の南北溝S D 3765の約4m東にあり、推定第1次朝堂院の想定中軸線から

第3図 推定第1次朝堂院東第一堂発掘遺構

東約107m(360尺)の位置にある。南北26間分(77m)を確認した。この上を第3整地層とD期の築地塼積土が覆う。

溝S D 3715は塼S A 5550Aの東17.5mにある素掘りの南北溝で、幅2~3m、深さ約1mある。奈良時代末まで存続し、少なくとも2回の改修がみられる。堆積層は3層に分かれる。下層からは多数の木簡が出土し、その実年代をつかむことができた。上層には多量の瓦、土器を含む。東西溝S D 8419は南北溝S D 3715に東から流れ込む素掘りの溝である。塼S X 8411はS D 3715に設けられた一辺4m程の溜りで、杭、板材とともに多数の木簡が出土した。

D期 第3整地層による整地が行なわれ、掘立柱塼が築地にかわり、基壇建物S B 8400が築かれる。この地区が最も整備された時期である。

基壇建物S B 8400は東西約19mあり、南北は20m分まで検出したが、さらに南へ延びる。基壇の掘込地業は全面を一様には掘り込まず、深い部分(0.5m)と浅い部分(0.3m)が帯状に複雑に認められる。掘込地業の底から整地層の上面までは粘質土を粗くつき固め、その上の基壇土はていねいに版築されている。基壇化粧は失なわれているため、建物規模の詳細は不明である。基壇西北にある土壇S K 8398から円形の柱座の造出しのある花崗岩製礎石が出土したが、すでに原位置から移動している。基壇の東西の縁辺には、幅0.5mほどの浅い溝S D 8401・8402がある。

築地S A 5550Bは掘立柱塼S A 5550Aの後身の塼である。第3整地層の上面に帯状に積まれた黄褐色粘質土があり、築地基底部の基壇積土と考えられる。上面は削平され、築地本体の位置、規模は確認できなかった。積土の西辺に沿って南北に延びる溝S D 8392は築地の西側雨落溝である。塼S A 5550Cは築地塼S A 5550Bが再び掘立柱の塼に改作されたものである。柱間は10尺でS A 5550Aと重複するが、柱心は約50cm東へずれる。

建物S B 8370は5間×4間、南北両廂の東西棟掘立柱建物である。桁行柱間約2.1m(7尺)、梁間が身舎2.4m(8尺)、廂2.7m(9尺)である。柱穴底に小さな礎板を敷く。柱穴掘形から出土した土器で奈良時代末に建てられたことが明らかになった。この建物の西妻はS B 8400

の基壇の南北中軸線にそり、棟通りは東西溝 S D8372・8373の心にある。溝 S D3715の東 16mに掘立柱建物 S B8405がある。東西2間、南北1間(8尺等間)分を検出した。これに重複する S B8406は南北棟建物の南妻であろう。柱間は2.7m(9尺)である。S B8405の東南7mに井戸 S E8407がある。一辺2.7mの方形で深さ1mあり、底に礫を敷く。奈良時代中頃に造られ、奈良時代末に廃絶する。ほかに、調査地の東端で円筒埴輪列の一部を検出した。

遺物 土器、瓦、木器、木簡などがある。土器は主に南北溝 S D3765・3715、井戸 S E8407から出土しており、調査区全体としては量は少ない。S E8407の下層から平城宮Ⅲ(750年頃)、上層から平城宮Ⅴ(780年頃)の土器がまとまって出土した。ほかに須恵器の蓋、杯を転用した硯、灰陶陶器、白磁、土鍾などがある。木器の大半は溝 S D3715から出土した。多くは棒状、板状品であるが、匙、篋状品、付札状品、箸、車輪部材、人形、形代などがある。

瓦には軒丸瓦196点、軒平瓦103点がある。このうち平城宮瓦編年のⅡ期(721~745年)の瓦 6225, 6311, 6661, 6685型式が多く、ついでⅠ期(708~721年)の瓦6284, 6664 C・K・H, 6665型式や藤原宮式が多い。Ⅲ(745~756年)、Ⅳ期(757~767年)の軒瓦は少ない。堀 S A5550の西側では和銅創建時の軒瓦が多く、東側ではⅡ期のものが主体を占めている。溝 S D3715では、その上層からⅠ期からⅣ期の瓦、中・下層ではⅠ、Ⅱ期のものが出土している。瓦敷 S X8408から軒丸瓦6311型式がまとまって出土している。

木簡は南北溝 S D3715、堀 S X8411、これに注ぐ東西溝 S D8419から総数163点出土した。主に S X8411に多量の木片とともにその大半が包含されていた。記載内容は文書、帳簿、伝票、付札などで、神亀3年から天平3年までの紀年銘木簡が7点あり、この頃宮内で大規模な造営事業が行なわれたことが確認された。

まとめ 4期の遺構変遷において、A・B期は和銅年間、平城宮造営当初の時期にあたる。第1次内裏地区では周囲に築地回廊がめぐる。一方、第1次朝堂院地区を区画する施設としては掘立柱堀 S A8410が考えられるが、一部を検出したにすぎず、なお今後検討する必要がある。C期は霊龜年間にあたり、東西を画する掘立柱堀と基幹水路が設けられるが、内側には建物は検出されていない。D期は神龜年間にあたり、この時期にはC期の堀が築地堀に改作され、中に基壇建物が築かれ、この地域が最も整備された時期である。

東院庭園地区の調査(第99次) 今回の調査は第44次調査で一部を検出した園池と東面大垣の北隣接地において行なった。この地区は北から延びる低丘陵が平地に移る付近の沖積面にある。地盤は砂地だが、地下水位は高い。調査地を庭園地区(J, K区)と東面大垣地区(E, D, H区)に分けて記述する。

庭園地区で検出した主な遺構は園池1カ所、建物4棟、渡廊1棟、橋1基、柱囲3条、溝4条、湧泉施設1基、土壇などである。これらの遺構は大きくA・Bの2期に区分でき、B期はさらに2期に分れる。

A期 園池 S G5800Aとその西岸に建物 S B8480、北岸に溝 S D8456がある。S G5800Aは

新池 S G5800 B の下層から検出された。池は大垣に沿い、幅約 13 m の空間地をとって鍵の手に延び、複雑に屈曲した汀線をもつ。東、北岸の汀線を全て検出し、南北 45 m、東西約 46 m のひろがりまで確認した。南岸は第 44 次調査地に延びる。南面大垣から北岸まで約 72 m ある。入江、岬は上層池に比べ出入が少ない。東岸に岬 2、入江 3、西岸に入江 5、岬 2 がある。池の深さ

は平均40cm程度であり、池底に北岸では岸に沿って径30cm前後の扁平な安山岩を2～6m幅で带状に敷く。この石敷は東岸では上層池の岬S X8452の下まで続く。西岸では岬S X8458の北側まで延び、この岬の周囲では失われている。この岬の南側の入江にも同様な石敷がある。池の中央には玉石を敷く。北西の岸辺では地山を急勾配に掘り込み、人頭大の石を積み、護岸石組とする。建物S B8480の周辺、東岸では緩やかな斜面に径10cm程の玉石を敷きつめる。南北溝S D8456はS G5800Aの東北隅に注ぐ石敷の溝である。幅60cm、底石のみ残り、側石は失われている。S G5800Aへの給水溝である。

建物S B8480は西岸にあり、掘込地業のみをとどめる。幅約2.5m、深さ1.5mの溝状の掘込みが東西12m、南北8.5mの矩形にめぐる。底に石を多数入れ、粘土と砂を版築状につき固めている。柱を据えつけた跡は残っていない。これをB期整地土が覆っている。B期の改修により、礎石建物の基壇が削平されたものであろう。

B期 当初、園池S G5800Bの周囲に礎石建物S B8470、柱囲S A8467・8468、橋S X8453が配され(B<sub>1</sub>期)、のちに柱囲は一部改修され、その東に建物S B8466、S C8465がとりつく(B<sub>2</sub>期)。第44次調査で検出した八角楼S B5880などの遺構もB期に属する。

園池S G5800Bは下層池S G5800Aを全面的に造り替えている。下層池の石敷、石組の大半をとりはずし、粘土で埋め、その上に玉石を約10cmの厚さに敷きつめ、汀線まで玉石敷とする。池の深さは30cm程度である。池の概形は下層池を踏襲するが、岬や入江の出入は大きくなり、曲線的となる。北岸の築山S X8457は下層池の石敷に粘土、砂質土を交互に高さ60cm程度に盛り上げ、その上に玉石を置き、最大約1mの三笠安山岩、縞状片麻岩、花崗岩を据える。岬S X8452、半島S X8459、中島S X8460同じ造成方法で築かれ、汀線に沿って大型石が配される。中島は南北9m、東西11mあり、北中央がくびれる。高さ0.5mある。池の東北隅は築地際まで拡張され、洲浜とされる。池は南北60mあり、東西もほぼ同規模と推定される。

礎石建物S B8470は5間×2間の東西棟建物で、柱間は桁行、梁間ともに10尺等間である。東妻柱と南、北側柱に安山岩の礎石5個が残る。棟通りに床束があり、東2間は池に張り出す。東妻に東西2間(7尺等間)、南北2間の棧敷様施設S B8471がとりつく。

S A8467・8468はS B8470の前面を囲む掘立柱列である。柱根は八角形に面取りされ、凝灰岩の根巻石を伴う。S A8467はS B8470の南2.7m(9尺)にある。その南約9m(30尺)にS A8468があり、S A8467と柱筋がそろう。この柱列の東西両端では内側1.5mに4本の大型柱が立つ。柱は太さ42cm、八角形である。柱穴掘形は深さ約1mあり、底に根太を置き、柱に角材を差し込み、支えとする。池中の掘形には礎石を据えている。B<sub>2</sub>期にはこの柱を除き、西に1.5m隔てて、南北柱列S A8469がとりつく。S A8469は柱間が4間で、両端間1.5m(5尺)、中央2間が約3m(10尺)である。さらに、S A8467・8468の東側に建物S B8466、渡廊S C8465がとりつく。大型柱の柱根はS B8466の礎板に転用される。建物S B8466は4間×3間の南北棟総柱建物で、池に張り出す棧敷様施設であらう。掘立柱で柱筋は柱列とそろう。

桁行柱間は端間1.5m（5尺）、中央2間が3m（10尺）、東側柱南端間は約2.4m（8尺）で、柱を渡廊S C8465と共用する。梁間は西1間が1.5m（5尺）、他は2.4m（8尺）である。西隅柱2本と西2列目の柱5本を柱列と共用する。柱穴掘形には鬼瓦、凝灰岩切石を敷いている。他に2個の礎石がある。渡廊S C8465は掘立柱で3間×1間である。桁行柱間約3.6m（12尺）、梁間2.4m（8尺）である。南側柱はS A8468、S B8466と柱筋がそろう。橋S X8453はS G5800Bの東北隅に南北にかかり、桁行5間（9尺等間）、幅3.0m（10尺）である。南北溝S D8455は東面大垣の西約4mにあり、上層池東北隅に注ぐ素掘りの溝で、幅1.8m、深さ0.4mある。上層池の給水溝である。

遺物 S G5800Bの堆積土を中心に多量の土器、瓦、木器、木簡、金属器、植物遺体などが出土した。木簡は堆積土から10点出土した。瓦には軒丸瓦96点、軒平瓦100点がある。このうち平城宮瓦編年Ⅰ期（708～721年）のものは軒丸瓦5点である。Ⅱ期（721～745年）の軒瓦は最も多く、6225、6308、6663型式が主である。Ⅲ期（745～756年）のものはそれに次ぐ。Ⅳ期（757～767）の瓦は極めて少ない。下層池S G5800AからはⅡ期の瓦が出土する。上層池S G5800B石敷中にはⅡ、Ⅲ期、その堆積土にはⅣ期の瓦が含まれる。また、鬼瓦2点、緑釉瓦1点、水波文塼1点がある。土器は主にS G5800Bの堆積土から出土した。その大半が平城宮Ⅶ（825年頃）に属する。S G5800Aからは平城宮Ⅲ（750年頃）までの土器を出土した。上層池S G5800Bの堆積土とその上層からは香炉蓋、三足盤など緑釉、灰釉陶器30点が出土した。墨書土器は23点あり、「蔵人所」と記した土師器がある。木製品は挽物円盆、蓋、杓子、布巻棒、斎串などが238点ある。建築部材も多く、斗拱の模型がある。金属製品には鎌、釘、銅製留金具などがあり、ほかに和同開珎1点、神功開宝1点出土した。

東面大垣地区の遺構には築地大垣1条、溝3条、塀2条、建物1棟などがある。築地大垣S A5900は東院東南隅から北138mまで確認した。築地の基底部をH区で一部検出した。幅約3m（10尺）である。溝S D5815はS A5900の東側雨落溝である。幅0.7m、深さ0.4m前後あり、H、D区では両側に瓦をたて並べている。暗渠S D8436は東面大垣南端から北108m（360尺）にある。築地部分では幅1.2m、深さ0.5mの掘形に厚さ10cm、幅24cm、長さ5m以上ある桧板を組み、凝灰岩切石を蓋石とする。この溝は築地雨落溝の東で閉渠となり、東二坊間路西側溝S D5780に注ぐ。S D5780は素掘りの溝で、深さ0.4～0.6mある。少なくとも1回の改修が認められる。暗渠が注ぐ付近で有機物層が形成され、多数の木簡が出土した。天平15、18、19、20年の紀年銘のある木簡がある。有機物層を境に上下2層に区分できる。大垣と大溝の間は幅約7.5m（36尺）程の塼地となる。大垣には改作は認められず、奈良時代の前半に造営され、奈良時代を通じて存続する。奈良時代以後、大溝、雨落溝が埋められ、仮設的な建物S B8433、塀S A8440などが設けられる。

遺物 主にS D5780から、土器、瓦、木器、木簡などが出土した。木簡は569点あり、紀年銘木簡7点を含む。「東園」としたものがあり、園池地区を東園に比定しうるかもしれない。

い。土器はS D 5780から平城宮Ⅱ(725年頃)のものが出土し、堀地の整地土から緑釉、灰釉陶器が少量出土した。また「酒坏」としての墨書土器がある。瓦は軒平瓦69, 軒丸瓦92点ある。主体はⅡ期の瓦がこれにつぐ。Ⅳ期以後の瓦は少ない。木製品には槽、曲物、糸巻、人形など多様な製品がある。

まとめ 東院東南部の築地はすでに奈良時代前半に造営されており、奈良時代末まで存続する。築地の改修は認められなかった。築地の内側には南北60m, 東西約60mの範囲に園池がひろがる。A期は天平末年以前で、養老5年頃まで遡りうる。B期は天平勝宝年間に始まり、池が廃絶するのは9世紀前半である。A期園池の岸辺に沿って扁平な石を敷きつめる技法は、奈良時代前半に造られた左京三条二坊六坪(第96次)の北宮園池と類似するが、池中央部を玉石敷とし、護岸に石を積みあげる方法などに相違がみられる。B期の園池は玉石敷で旧池と全く趣を異にし、平安時代庭園に通じた造園方法がうかがえる。

平城宮西北地区(佐紀池)の調査(第101次) 佐紀池は平城宮の西北にある東西160m, 南北150mの不整形の溜池で明治17年に現在の一条通りに築堤して造られた比較的新しい池である。池の南端は特別史跡平城宮跡の一部として史跡指定と国有化がなされている。一方、北端はなお民有地であり、今回の調査はこの部分を対象とした。池の北端部に幅15m, 東西67mのトレンチと、これの東南約30mの地点に幅6m, 南北26mのトレンチとを設けた。

奈良時代の遺構 園池1カ所、溝2条がある。園池S G 8500は西岸と東岸の一部を検出した。東岸の汀線は東西トレンチでは南北に、南北トレンチでは東西に延び、北端部で西へ狭まる。西岸は真南北に延びる。岸は傾斜約10°の緩やかな斜面で、拳大の石を幅2m程に敷く。東岸には大小の自然石が配されていたらしい。池底は南へ緩やかに下る。池には厚さ約0.5mの植物腐蝕層があり、奈良時代から平安時代初期の遺物が出土した。溝S D 8501は東西トレンチ中央の素掘りの南北溝で、S D 8502は南北トレンチ中央の素掘りの東西溝である。

奈良時代以前の遺構 溝4条、堰2基、土坂1がある。すべて園池S G 8500の底面で検出した。溝S D 8520は東西トレンチ中央を南北に蛇行して流れる幅約3m, 深さ0.6mの溝で、途中で2つに分流したのち、また合流する。この溝の分流の始点に幅10~15cm, 厚さ5cmの矢板を一行に打ち込んだ堰S X 8524がある。溝S D 8521は幅1.5m, 深さ0.5mのV字溝で西南からS D 8520に注ぐ。この合流点に、太さ6cmの丸太杭を一行に打ち込んだ堰S X 8523が設けられる。

遺物 園池S G 8500の堆積層から土器、瓦、木器、金属器が出土した。土器は平城宮Ⅱから9世紀中頃までのものを含む。土師器の皿で、底部外面中央に「天平十八年潤九月廿七日□□□」とあり、内面に以下のように墨書したものがある。

(上段)	二 辛 □ <sub>カ</sub>	(中段)	土 高 佐 良 一	賽 都 支 十 口	□ <sub>都</sub> 文 二 口	鉤 形 冊	毛 比 冊	佐 良 八	高 佐 良 九	(下段)	匚 五 柄	片 真 利 升	毛 比 冊	佐 良 冊	□
------	--------------------------	------	-----------------------	-----------------------	-------------------------------	-------------	-------------	-------------	------------------	------	-------------	------------------	-------------	-------------	---

#### 平城宮跡と平城京跡の調査

辛櫃に納めた容器の品目、数量を記したものであろう。瓦には6225、6282型式などの軒丸瓦9点、6663型式などの軒平瓦4点がある。習書と文様風の木簡が2点ある。木製品は下駄、甕底板、曲物底板、刳物、齋串など14点ある。ほかに、神功開宝1点、鉄鎌1点が出土した。

溝S D 8520から後期弥生式土器、庄内式、布留式の土師器、木器、金属器が出土した。土器のほとんどが布留式であり、後期弥生式土器、庄内式土師器は少量である。木器には鋤、きぬた、ちきり、梯子があり、金属製品には小型素文鏡が1面ある。径2.8cm、厚さ0.5mmで、鏡背に鈕をもつ。なお、東西トレンチで土層観察のためにS G 8500の池底を一部掘り下げた際、池底より下のバラス層から縄文時代中期の土器片が12点出土した。

まとめ 佐紀池の北端部が奈良時代の園池であったことが明らかとなった。この地域は奈良山丘陵の谷筋にあたり、自然地形を利用した園池である。規模と形は現在の佐紀池とさほど大きな差異はなかったものと推定される。造成の時期は推定第1次内裏地域に築地回廊が設けら

れる和銅造営当初、遅くとも神亀年間に遡る可能性があり、続日本紀天平十八年「秋七月癸酉，天皇御大藏省覽相撲，晚頭軋御西池宮」の記事にある「西池宮」に関連する可能性が強い。

## 2. 平城京の調査

**右京五条四坊三坪の調査（第100次）** 本調査は奈良市の仮称 第十三中学校建設計画に伴う事前調査であり、奈良市から調査を委託されて実施した。当該地は右京五条四坊三坪の全域を包含しており、谷筋をはさんで北東部と南西部が丘陵上となり、標高は約80mで五条一坊付近の平地部より20mほど高い。従来、右京における本格的調査は行なわれておらず、特に条坊遺構に関しては西隆寺・唐招提寺などで一部検出されたにとどまっていた。したがって調査は丘陵地域における京の造成状況、特に条坊遺構の解明を主な目的とし、坪の周囲に9本、坪内に4本のトレンチを設けて実施した。発掘成果はすでに「右京五条四坊三坪発掘調査概報」（奈良市1977年3月）として公表されている。

**遺構** 西三坊大路、五条条間路、六坪と三坪の間の小路に関しては予想位置で道路の側溝と思われる溝を検出したが、三坪と四坪の間の小路は検出できなかった。西三坊大路に関してはI・J両トレンチで南北溝SD001・002を検出した。溝の心々距離は70尺を超えるが、方位の振れの少ないSD001の溝心から30尺（推定大路幅の1/2）西を大路心と仮定すると、朱雀大路心からの距離（朱雀大路調査で明らかとなった平城京造営方位N0°15'41"Wによる換算値）は1601.93mとなり奈良尺1800尺の基本方眼地割とほぼ一致する。五条条間路に関しては、Hトレンチで東西溝SD006・007を検出した。心々距離は約20尺で従来の条間・坊間路の幅員に関する知見4～8丈に比べて狭いこと、基本方眼地割線より12.7尺北にずれていることなどの問題を残し

ており、Kトレンチではすでに削平されたのか側溝に相当する遺構は検出されていないことと合わせて、なお今後の検討が必要である。六坪・三坪間の南北小路に関してはFトレンチで南北溝SD004を検出した。溝SD004には西方から暗渠SX041が流れ込んでいること、溝の西側に近接して塀SA042が存在することから、この溝は小路の西側溝とみられる。溝

心から前述の西三坊大路心までの距離は 135.97m で、坪計画寸法 450 尺と小路幅の  $\frac{1}{2}$  の長さ 10 尺を合わせた 460 尺に近似した値を示す。

奈良時代の建物は G トレンチで 2 棟、L トレンチで 3 棟、M トレンチで 1 棟、ほかに堀 5 条を検出した。建物はいずれも小規模な掘立柱建物で瓦の出土は極めて少ない。年代を直接示す遺物の出土はないが、柱掘形の重複関係や方位の振れによって A・B の 2 時期に分けられる。A 期は平城京造営方位にそったもので、S B 025・027・035、S A 028・029 がある。前述の南北小路の道路幅を 20 尺と仮定すると、この建物 3 棟は道路心よりそれぞれ 50 尺・150 尺・200 尺の位置に東側柱をそろえて建てられている。B 期は京の造営方位より北で  $0.5 \sim 2^\circ$  西へ振れており、S B 017・026・034、S A 018 がある。なお、宅地として最適だとみられる東北部の高台からは 1 棟の建物を検出したにすぎないが、遺構面が地表から  $0.2 \sim 0.3$  m と浅く後世に削平されている可能性が強い。このことは遺物が高台の西斜面から二次堆積で多量に出土していることから裏付けられよう。

高台の M トレンチと谷頭の L トレンチでそれぞれ井戸 S E 015・020 を検出した。S E 015 は、長さ 90 cm、厚さ 5 cm の板枠からなる一辺 80 cm の井筒組の井戸で、上から 6 段目まで確認したが、さらに続くと思われる。井戸の周囲は、四段に階段掘りしており (S X 016)、最下段は構築後すぐに埋戻して洗い場として利用したと思われる。井戸は構築後比較的早い段階に崩壊し、8 世紀前半には廃絶したものと思われる。S E 020 は径 1.1 m の円形縦板組の井戸である。板枠は幅 28 cm、厚さ 6 cm の細長い板材 14 枚から成り、板枠が折れて井戸内に落ち込んでいたものと合わせると、長さ 4.5 m に復原できる。板枠の左右には上下 4 箇所にも枅穴を設けて固定している。また、上端の木口にも枅穴を設けているものもあり、側板上部を横材で固定していたものと思われる。S X 021 は、S E 020 の上段の掘形内にあり、井戸枠の西側に広い平坦面をとり、西に向かう溝がとりついていた。井戸に付属する洗場とその排水溝とみられる。S E 020・S X 021 から出土した土器より井戸の廃絶時期は 8 世紀中頃と考えられる。建物の周辺から出土した土器は平城宮 I 期 (710 年頃) から III 期 (750 年頃) のものであり、井戸の廃絶年代と合わせ考えると、この地域は 8 世紀後半にはすでに宅地としての機能を失っていたものと思われる。

東北部の高台と西北部の谷頭との境には階段状遺構 S X 024 があり、前述の条坊遺構から求めた坪の東西心と一致する。また、坪の南北心は東北部の高台から南の谷への傾斜する位置にのっている。したがって、三坪がどのように宅地割されていたかは明らかでないが、少なくとも坪の東西心・南北心には境界があったとみられ、 $\frac{1}{4}$ 町以下の宅地が想定される。

そのほか、S B 025 の南に接して火葬墓 S X 030 を検出した。一辺 0.4 m、深さ 0.5 m の墓坑の底に蔵骨器が直接納置されていた。墓坑に接して安山岩質の割石があり、墓坑上面を覆っていたものとみられる。蔵骨器は壺形須恵器で平城宮第 III 期 (750 年頃) に該当するが、蓋は別物でやや遡る。器内には微小な骨片と絹織物を含む沈着物と、墨・筆管・和同開珎が入ってい

た。京内に於ける奈良時代の火葬墓としては初めての例であり、京内での埋葬を禁じた養老喪葬令の規定との関連が問題である。

遺物 土師器、須恵器、瓦埴類、木製品のほかに、火葬墓の副葬品がある。これらは奈良時代前半期のものが多くを占めて

第7図 第100次出土蔵骨器と納置物

おり、主に土埴SK013、溝SD014、井戸SE020、土埴SK052、階段状遺構SX024から出土した。瓦埴類は軒丸瓦4点、軒平瓦1点、埴2点と極めて少ない。SE015・020の井戸底からは曲物8点、刀子柄1点が出土した。火葬墓の副葬品としては、墨、筆管、和同開珎4枚がある。墨はカラスミ形をしており、正倉院伝世品と同形であるがやや小さい。筆管は篠竹製とみられ、一方の端部の内側を削って内径を広げており、これは筆毛を取り付けるための加工とみられる。

法華寺経楼推定地の調査（第98—17次） 本調査は法華寺境内での収蔵庫建設計画に伴う事前調査である。現本堂および鐘楼は、従来の発掘調査の結果から旧位置に再建されたものとみられており、当該地は本堂中軸線に対して鐘楼と対称位置にあることから経楼の遺構の検出が期待された。

調査の結果、掘立柱建物3、溝3、土埴2、井戸1を検出した。経楼推定地は後世の削平を受けており、経楼の遺構は確認できなかった。経楼北面雨落溝推定位置で検出した野面石組の東西溝SD03も後述するように、その北方の建物SB01Bと一連のものと考えられる。

SD03以南の経楼推定地では掘立柱建物SB05や中世以降の南北溝SD12、近世の井戸SE09などを検出した。掘立柱建物SB05は柱間約3mで東西2間・南北1間分を確認した。

SD03以北では3棟の建物SB01A・BおよびSB02を検出した。SB01Aは1辺1m以上の大きな掘形をもつ掘立柱建物で東西2間（柱間約3m）・南北1間（柱間約2.7m）分を確認した。遺存していた柱根は直径60～70cmと太いもので、面取りされた痕跡が認められる。柱根下には根固めとして瓦片が詰められており、軒丸瓦6285A・軒平瓦6667Aが出土した。これらの瓦は天平初年を降るものがなく、SB01Aは8世紀前半に造営されたと推定できる。SB01BはSB01Aの柱を根本で切断した上に根石を置いて、礎石立ち建物に改造している。平面は旧規を守っている。このような例は従来の法華寺境内の発掘調査でも、現本堂地下・本

第8図 法華寺経楼推定地発掘遺構図

堂南・本堂東で3棟が確認されている。東西溝S B03は南岸を野面石で護岸しているのに対して、北側では幅0.4mほどが一段低くなり、ここに多量の瓦片をつめ込んでいる。これは北岸施設の裏込めとみられ、この上に基壇の延石と考えられる数個の石がある。裏込めからは8世紀後半の土器が出土しており、年代的にもS D03はS B01 Bと一連のものとみられ、S B01 Bの南面雨落溝と考えられる。掘立柱建物S B02は東西2間（柱間約3m）、南北1間分を確認したがS B01 A・Bとの前後関係は明らかでない。

遺物としては土器類と瓦類がある。土器類の多くは土壇S K08から出土しており、多量の土師器・須恵器のほかに施釉陶器片約150点がある。瓦は古代から近世にわたり、軒丸瓦56点、軒平瓦52点、緑釉瓦一点、二彩釉瓦片1点が出土している。

#### 第9図 法華寺金堂推定地発掘遺構図

調査の結果、当初の予想位置には経楼跡がみられず、かえって経楼推定位置に一部かかって奈良時代後半の礎石立ち建物を確認した。今後、法華寺の伽藍配置の再検討が必要となった。

**法華寺金堂推定地の調査**（第98—21次） 本調査は納屋新築に伴う事前調査である。当該地は法華寺の南北中軸線にあり、東南に隣接する地区では1974年の調査で金堂と推定される建物の南側柱を検出している。今回の調査地では推定金堂の南側柱西延長部分と入側柱の検出が予想された。調査の結果、建物2棟、中世の井戸状遺構等を検出した。推定金堂S B01は南側柱を2間（柱間14尺）分を確認したが、入側柱の痕跡は見出せなかった。しかし、現本堂地下および本堂東の地下遺構が掘立柱と礎石立ちの柱を混用しているので、この建物も入側柱は礎石を用いていたために削平されて痕跡を留めなかったものと考えられる。S B02は東西3間（10尺等間）、南北1間（12尺）分を検出した。南側柱はS B01と重複し、これより新しい。東西棟建物の南廂部分と推定される。そのほか中世の井戸状遺構および小柱穴8個を検出した。井戸状遺構からは鎌倉時代の瓦片が多量に出土した。

**東大寺西面大垣跡の調査** 本調査は奈良県労働者住宅生活協同組合の分譲住宅建設計画に伴う事前調査であり、奈良県教育委員会に協力して発掘を行なった。発掘成果は『東大寺西面大垣跡発掘調査概報』（奈良県教育委員会 1977年1月）としてすでに公表されている。当該地は東大寺の転害門と焼門（西面中門）のほぼ中間にあたり、平城京東京極大路東半部および東大寺西面大垣の遺構の存在が予想された。検出した遺構は古代から現代まで6期に大別でき、上記の予想を裏付けるとともに、中世以降の宅地割の変遷が明らかになった。以下時期別に述べる。

I 期（奈良・平安時代） 平城京東大路 S F 100、その東側溝 S D 90、東大寺西面大垣 S A 05、その雨落溝 S D 09・10がある。東大路 S F 100は、旧河川の堆積土上に、バラス混り暗褐色土を盛って造成している。路面からは奈良時代の瓦が出土し、その上層から東大寺式軒丸瓦 6235、興福寺式軒丸瓦 6301等が出土した。大路の東端に側溝 S D 90がある。S D 90は西肩のみを検出し、東肩は中世の溝で壊されているので幅は不明である。中から奈良時代から平安時代初頭にかけての瓦が出土している。

東大寺西面大垣については、転害門と焼門とを結ぶ線上で、築地 S A 05を検出した。旧河川のバラス層の上に厚く積土した後に、幅約 4 m の掘込地業を行ない盛土しているが版築はみられない。この盛土中に古代の瓦を含んでいる。築地は基底部しか遺存しておらず、築地本体の幅は不明である。築地をはさんで東西に雨落溝 S D 09・10があり、溝の心々距離は 6.2 m であった。築地心から大路東側溝西肩までは 14.3 m である。なお、大路・築地とも平安時代における改造の跡はみられない。

II 期（中世） 東大路の上層には、東西石組溝 S D 11、南北石組溝 S D 17、S D 11に流れ込む暗渠 S X 83などが設けられ、大路東側一帯が次第に宅地化していった。東大寺西面大垣 S A 05はその北部を積み替えるとともに、築地の西側雨落溝 S D 10を改修している（S D 10—C）。S D 10—Cからは中世の瓦・五輪塔の台座等が出土した。S D 09の東側で素掘りの南北溝 S D 16を検出した。瓦器や梵字のある軒平瓦が出土している。

III 期（近世） 京街道と西面大垣との中間に設けられた南北石組溝 S D 20と、S D 10—Cを改修した S D 10—bを検出した。S D 10—bと S D 20のそれぞれの中に打ち込まれた南北柵 S A 06・07も溝と同時期とみられる。S D 10—Cの心より西 11.1 m の地点に石組井戸 S E 22があり、S D 20の心より西 11.1 m の地点にも石組井戸 S E 21がある。京街道と西面大垣の間は南北溝 S D 20を境として東西二つに宅地割されたとみられる。東西の宅地内において井戸が同位置

にあるとすれば、西方の宅地の西境は現在の京街道東歩道の東端あたりと推測される。

IV期(近世) SD20, SE21・22は廃棄されて、III期の東西の宅地は一つになり、宅地東限のSD10は再び改修されている(SD10-a)。さらに、この宅地の東端に石組の井戸SE25と、井戸から竹筒を用いて水を西方に引く上水施設SX56~64を設けている。この上水施設はSX57→SX58→SX63と三度作り替えている。この時期には多量の木炭・鉄滓をはじめ、韃の羽口などが出土しているため、近くに鍛冶屋の存在が考えられる。この時期の遺構は火災にあっており、西面大垣も崩壊してしまった。この火災は「東大寺諸伽藍略録」にみえる慶長11年(1606)の今小路町を含む手貝町南方の大火に相当するものと考えられる。

V期(近世) 東西に長い宅地が、石組列SX75や東西方向の杭列SA08によって南北にも細分化してくる。SX75は北に面をそろえており、崩壊後の西面大垣を横切って設けられている。その北に井戸SE23をつくる。SX75とSA08に挟まれた南北幅9mの地域内には礎石立ち建物3棟SB01・02・03が建つ。礎石建物はいずれも南側柱のみを確認したにすぎないが、北側柱がSX75の延長線以南におさまるとするなら、梁行は2間と推定される。礎石建物の周囲には座棺SX50、火葬骨壺SX52, 55があり、五輪塔の一部や仏花器、多量の灯明皿なども出土していることからみて、この地域の遺構は東大寺の子院など寺の関連施設と考えられる。

**薬師寺西塔跡の調査** 本調査は薬師寺からの依頼により、西塔創建時の遺構を明らかにする目的で行なったものである。西塔の創建は、東塔の建てられた天平2年(730)頃とみられており(『七代寺年表』、享禄元年(1528)には筒井順興の乱によって金堂・講堂とともに焼失した(『薬師寺年記』)。その後、万治三年(1660)に食堂の西北方にあった文殊堂が西塔跡に移築され(『薬師寺縁起国史』『薬師寺志』)、昭和9年に撤去された。現基壇上面には心礎のほか、文殊堂で用いられていた礎石が12個残っており、東北と東南の隅の2個の礎石には一辺60~70cmの方形柱座があり、西塔の礎石と考えられている。これまでの調査としては、昭和9年に足立康氏によって基壇上面の簡単な調査が行なわれ、昭和44年には薬師寺発掘調査団(団長杉山信三氏)が西面階段部分の遺構を明らかにしている。

遺構 心礎が原位置を保っていること、方形柱座をもつ2個の礎石は原位置を動き享禄焼失による焼土上に据えられていることを確認し、さらに四天柱と側柱の掘形をすべて検出した。裳階柱の掘形は発見しなかった。掘形が浅かったために削平されたものと思われる。心礎には掘形がなく、基壇築成の途中で据えられている。基壇化粧は花崗岩製地覆石と凝灰岩製羽目石とがわずかに遺存しており、基壇の一辺の長さは約13.6mと知られた。延石は用いず、地覆石上面に約1cmの段を設けて羽目石を受け、見え懸かり部分を切石とする一方、隠れる部分には自然面を残している。階段は四方に設けられ、耳石を受ける納穴の施された受石が東・西・南の階段に遺存しており、階段の規模は幅約3m、基壇からの出約1.8mであることが知られた。この受石には納穴の仕口に差異がみられることや西南隅地覆石の西面にだけ見付幅2cmほどの切面が施されていることなどから、基壇化粧石には創建当初から転用石材を混用していたもの

第11図 薬師寺西塔跡発掘遺構図

と思われる。

基壇回りには玉石を敷き詰めた幅0.5～0.6mの犬走りがめぐる。その外周に扁平な石を立てて側石とする内法幅0.5m、深さ5cmほどの雨落溝がある。雨落溝は階段部分も凸型にめぐり、底には玉石を敷いている。同様の玉石敷は溝の外にも一面に広がっており、基壇縁から3.5mほどのところには一列に立石を並べて、塔を中心とする一辺20.6mほどの正方形の区画を構成している。なお、南面は後世の池によって破壊されており、この見切石は確認できなかった。玉石敷はこの正方形の区画の外方へさらに広がっており、範囲確認のため北方へトレンチを拡張したが、玉石敷はなお発掘区外へ続くとみられ、回廊内全域が玉石敷であった可能性

も考えられる。なお、玉石敷の上には灰黄褐砂質土が堆積し、その上に焼土層がのっており、享祿焼失時にはすでに石敷面は埋もれていたとみられる。

基壇の復原高は1.4mで、その築成は次のような過程を経ている。掘込地業は行なわれず、旧地表面に直接積みあげている。まず、基壇の範囲全域に0.4～0.5mの厚さで暗灰黄褐粘土とバラス土を互層につきかためる。次いで、心礎を中心とする半径2.5mほどの範囲のみに入念に版築を行ない、その回りに灰黄色粘土を積みあげる。同時に基壇回りでは玉石を敷くために灰色粘土で整地している。次に、根石を置いて心礎を据えつける。その後、基壇上面まで褐色砂と粘土を互層につき固め、心柱以外の柱の掘形を設け、礎石を据える。最後に、階段部分に黄褐色土を積み、基壇化粧を行なう。

そのほかに、発掘区南端でやや時代の降るとみられる池の汀線を確認し、また、発掘区東辺と基壇南辺に沿って石敷および基壇を崩して設けられた竹筒の下水施設を検出した。

遺物 基壇上面の焼土層からは焼け崩れた塑像片や壁土が、基壇回りの焼土層からは大量の瓦が出土している。塑像片は、長和4年(1015)の『薬師寺縁起』に東西兩塔に各々釈迦の四相の群像を置くと記されていることに相応すると考えられる。塑像片には頭部・手・胴部・足・袈裟・甲などがあり、なかには如来像・菩薩像と判定し得るものもある。また、彩色や金箔が残っているものもある。胎土には雲母の多い緻密な粘土を用いている。このほか塑像の胎土とは異なり、砂粒を多く含んだ破片があり、直線や曲線の凹凸に富む文様が施され、白色に彩色されている。これらは塑像の背景となった山岳や巖洞・台座などの一部とみられる。出土した軒瓦は約800点に達した。軒丸瓦は鎌倉・室町時代の巴文が多く、本薬師寺式や奈良時代の瓦は一部に満ちず、享祿焼失時にはすでに創建時の瓦はほとんど葺き替えられていたことが判明した。焼土層からは以上のほかに、榎先飾り金具、厚板、塑像芯銅線、鋳、带状留め金具などの青銅製品や、釘、鏝、座金などの鉄製品、和同開珎などの銭貨、および少量の須恵器片が出土している。青銅厚板には「第二□」と陰刻したものがあり、相輪の一部かとも考えられる。

**法隆寺本坊西方地域の調査** 本調査は法隆寺寺務所の建設計画に伴う事前調査であり、既存建物の解体に対応して二次にわけて調査を行なった。第一次調査では遺構は検出されず、古代から中世にわたる瓦および土器片を包含した暗灰色粘質土層の上面に、水流によるものと思われる粗砂が堆積していた。第二次調査では、黄色粘土の地山から、中世の土師器片を含む小穴群と近世以降の溝4条および池の一部を検出した。池は長径約3mの小規模なものであるが、岸には人頭大の石がいくつか残っており、底には小石を敷いている。(須藤隆・清水真一)

第12図 薬師寺西塔跡出土塑像